

北のとびら



HOKKAIDO
ARTS FOUNDATION

発行／財団法人北海道文化財団

特集

アート・マネージメント・ゼミ

劇場／新時代への展望

平田 オリザ

インタビュー

合田 経郎

[アニメーション作家]



No.

85

AUGUST 2010

まちの文化創造事業・シアタープログラム
えにわ夏のミュージカル2010

「星に祈りを」

平成22年8月14日〔土〕・15日〔日〕 恵庭市民会館 大ホール
主催: Sunday Play Project
共催: 財団法人 北海道文化財団・北広島市芸術文化ホール運営委員会



あらすじ

舞台は、東京都大田区。町工場を営む遠藤家の子供達は育ち盛りの5人姉妹。夢見がちな三女・美穂の夢は白人と結婚すること。不登校の次女・麻衣は同い年の工員・俊和に心をゆらす。末っ子・輪環は友達が虐待を受けているが、何もできないことに苛立ちを感じる。

そんなそれぞれの日常の中、突然工場にNASAからネジ製作の仕事が舞い込む。わずかな狂いも許されない作業だが、期限は翌日の朝6時。手を傷めた父・勤の代わりに俊和がつくることになるが…。明けの明星に向かって成功を祈る姉妹の想いは果たしていくかに…。

北のとびら

No.

85

AUGUST 2010

表紙/「こま撮りえいが こまねこ」より
(キャラクターデザイン・演出 合田 経郎)

CONTENTS

02 Stage
「星に祈りを」

04 インタビュー
合田 経郎 (アニメーション作家)

06 **特集** 劇場/新時代への展望
平田 オリザ (劇作家)

08 北海道の食 [第1回]
お米～北の人々のエネルギー～

10 地域からのお便り
・第20回「心とからだの健康セミナー」を終えて
・コミュニケーション教育・アウトリーチ事業(土別市)

12 この街この人 [第12回]
陸別町

14 アートギャラリー [第16回]
盛本 学史 (画家)

15 Information

「北のとびら」は、全道の文化ホール、文化施設などでご自由にお持ちいただけます。
※定期的に購読をご希望の場合、直接当財団へお問い合わせください。



資源の保護と環境への配慮を考え、本紙には古紙再生紙、インクは大豆油インキを使用しています。

取材・文/ 對馬 千恵 (P2、P4、P6、P12)
写真/ 西山 大介

Musical Number

- ウェークアップモーニング
- 旋盤工の歌
- 完璧な母
- 夢見た道
- 女子指導要領
- A HAPPY TIME
- 夜明け

個性あふれる五人姉妹の夢、希望、理想 笑い涙のミュージカルが感動の扉を叩く！

「本気」と「楽しさ」。この二つの言葉が今回の舞台を表すのにぴったりなキーワードになっている。この作品に登場する子どもたちは、虐待や非行など、皆それぞれに不安を抱えている。それは、一見すると明るくみえる主人公の5人姉妹にも無関係なことではなく、さまざまな思いにゆれていた。しかし、これだけの社会問題を物語の中に取り入れながら、舞台全体の印象は底抜けに明るく、心に響くヒューマニティあふれる作品となっている。

市民からなる「サンデープレイプロジェクト」のメンバーだ。「初公演の時には、次があるとは思っていなくて。舞台をみて次回に参加したいという声が多く、2年目、3年目と続いています」と、プロジェクトを立ち上げた奈良井朝晴さん。'08年に市民会館の指定管理団体の自主事業としてスタートし、翌年に「サンデープレイプロジェクト」が発足。市民が発信する夏のミュージカルとして、恒例の行事になりつつある。

「演出や何人かの役者は経験者ですが、それ以外はほとんど経験がない人ばかり。年齢も9歳から70歳代後半までと幅広いですが、みんな本気で取り組んでいます。お金をいただいて観に来ていただく「公演」なので、観客に感動してもらいたいことが目標です」と語る。

■まちの文化創造事業（共催事業）

シアタープログラム

地域のみなさんが参加する自主的・創造的な、音楽・演劇・舞踊等の舞台発表活動及び普及活動（ワークショップ、レクチャー等）を共催します。

- ・公募キャスト、スタッフによる市民参加の舞台公演など
- ・複数地域から参加する演劇祭、音楽祭など



平成21年公演「くれないの翼」



平成20年公演「オービータウンは大騒ぎ」



アニメーション作家

合田 経郎

子どもの頃の体験は、
嬉しさも悔しさもすべてが宝物

NHKのイメージキャラクター「どーもくん」の生みの親であり、大人から子どもまで幅広い人気を持つこま撮りアニメ「こまねこ」のキャラクターデザインと演出を手掛けた、合田経郎さんにお話を伺いました。

初めてなのに懐かしい 人形アニメーション

「こまねこ」は、'03年に東京都写真美術館で公開制作プロジェクトというのがおこなわれて、その展示のためにつくられた人形アニメーションなんです。1秒間の映像を作るのに24コマ必要な人形アニメーションの制作スタジオを美術館の中にセットし、覗き窓から来場者にのぞいてもらうという企画が始まりました。

僕はもともとCMディレクターの仕事をしていて、人形アニメーションをつくり始めたのは「どーもくん」がきっかけです。僕の描いた絵コンテを見て当時のプロデューサーがNHKでキャラクターの募集をしているからと声をかけてくれてたんです。企画が通って実際に人形アニメーションに取りかかると、子どもの頃に「おもちゃ」で遊んでいたような楽しさがあった、初めてやったのに「この楽しさは知ってる

画面に映し出される みえない空気をつくる

な」と感じました。そのプリミティブな楽しさが「こまねこ」という作品が生まれるきっかけになり、その後、劇場版を2本も撮ることになる人気作品になったんです。

作品の作り方にはいろいろなパターンがあると思いますが、自分の場合はキャラクターとストーリーをつくってデザインし、絵コンテを描き、

それをもとにスタッフの方と相談して完成に近づけるのです。自分自身は直接人形を動かすわけではなく、たとえば人形を動かすためにはアニメーターという専門の方がいて、人形の感情を表現する動きを付けていく。人形の構造を知っている人が動かすのとそうでないのでは全く人形の表情が変わります。また、美術、照明などたくさんの方がかわってひとつの作品になるので、スタッフが作品づくりに





〔アニメーション作家〕
合田 経郎
Tsuneo Goda

劇ドワーフ代表取締役。日本映画学校を卒業後、CM制作会社にてCMディレクターとして制作を続け、'98年からNHKキャラクター「どーもくん」のキャラクターデザインを担当。'03年に劇ドワーフを設立。'03年アヌシー国際アニメーションフェスティバル入選（「どーもくん」）、'04年文化庁メディア芸術祭アニメーション部門優秀賞（「こまねこ はじめの いっぱい」）など受賞歴多数。



©dwarf/SCP/MCA



©NHK・TYO

夢中になれる環境づくりをすることが、クオリティを左右する大事な要素なんです。赤い大きな丸を描いてと言うよりも、「元気な太陽を描いてください」と言うほうがやる気になるでしょう。そういうところが、全部手づくりである人形アニメーションであるが故に、画面に現れてくると思うんです。仕事の現場だからこそ逆に楽しんで夢中になってもらうことが大事だなと思っています。

ものづくりの源泉は
日常の中にある

今回、音更町の小学校で行うワークショップでは、「毎日はお話のネタでいっぱい」というテーマで、子どもたちに工作をしながらコマ撮りの手法によるアニメーションを体験してもらおうと思っています。僕は、このワークショップを通して、アニメーションだけではなく、年賀状にイラストを描くのも食事をつくるのもいいですが、何も無いところからつくるといふこと自体が、楽しいことなんだと伝えたい。また、何かをつくる時のアイデアは、実は特別な出来事じゃなくて、身近で日常的なところにあるということに気づいてほしい

ですね。

僕は作品のストーリーなどを考える時、子どもの頃のことを思い出してつくることが多いんです。友達と喧嘩した帰り道とか、親にほめられて嬉しかったこと、逆にどうして親は分かってくれないんだろう、という子どもの頃に誰もが感じること、作品に取り入れます。人形アニメーションは昔からある原始的な手法ですから、これ以上古くなることはない。長く楽しめるメディアだから作品も長く楽しんでもらえる内容にしたいと思うと、昔の記憶から物語をつくるようになったんです。過去の体験はすべて、今の僕の財産。それをもっと、子どもたちから臆せず、色々なことを体験することが重要なんだと思います。

身近な味方に気づけば
明日につながる

自分らしいものがつくれなかったり、自分らしさってなんだろうと思う時期が僕にもありました。でも、世界中のどこかには理解してくれる人がいるはずと、勝手に信じて仲間と一緒につくってききました。みんなが集まった時、自分一人

はつくれなかったものが出来る上がる時もある。続けていけば身近なところにきつと味方が現れる。僕はその積み重ねで今があるんだと思います。僕もまだまだ学んでいるところなので、クリエイターを指しているひとにも諦めずに頑張ってくださいね。



うららワークショップ（広島市：平成20年7月）



アートカフェvol.5（札幌市：平成20年8月）

アート体感教室

国内外で活躍するアーティストが、道内各地域の学校や文化施設に Outreach、子どもたちと一緒にワークショップや、創作活動を行う事業です。子どもたちが優れたアーティストと身近に触れあい、表現する楽しさを体感することで、豊かな想像力や自己表現力を育むことを目的としています。

開催期間 平成22年
10月28日（木）・29日（金）の2日間

場所 音更町立東土狩小学校

アーティスト 合田経郎（アニメーション作家）

内容 「毎日はお話のネタでいっぱい」と題したワークショップ。子どもたちが、自分の身近に起こった面白かったことやびっくりしたことを、アニメーション（コマ撮り）で表現することに挑戦します。

劇場／新時代への展望

講演 平田 オリザ

平成22年7月5日(月) ・かでの2・7大会講堂 ・参加者数:260名

今年6月、国の文化審議会総会において文化政策部会から審議経過報告書が出され、文化芸術の振興に向けた動きが目覚ましくなっています。内閣官房参与で劇作家・平田オリザ氏を招いたアートゼミの講演から、文化政策に関する動きをまとめました。



平田 オリザ:東京生まれ。内閣官房参与、劇作家、演出家、劇団青年団主宰、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授 他多数。1982年に劇団青年団を旗揚げし、「静かな演劇」と呼ばれたムーブメントの中心となる。岸田国士戯曲賞を受賞した『東京ノート』をはじめ、『ソウル市民』『S高原から』など多くの作品が各国語で翻訳・海外上演されている。演劇手法を取り入れた教育プログラムの開発にも力を注いでいる。

公共の劇場は 創造・発信型へ

僕は、公共の劇場の主な役割は3つだと考えています。

一つ目は、演劇や音楽を鑑たり聴いたりという、鑑賞して学習する機能。二つ目はワークショップなどの交流機能。三つ目が、芸術作品を産み出す創造・発信機能です。

ところが、日本の公共の劇場には大前提として「貸館」という機能があり、貸館と鑑賞事業を中心に運営されています。「誰にでも公平に貸す」という貸館事業の背景には、日本の劇場が、芸術施設ではなく集会施設である公会堂としての利用からスタートした、という事情があります。

また、鑑賞事業については、日本が豊かになり始めた昭和30〜40年頃には、東京から舞台作品を招くことを中心とした

運営が、地方の公共の劇場にとって正しい施策のひとつだった、ということがあります。でも今は、札幌でもいい芝居を上演しているし、特別なお金持ちではなくても海外の劇場等へ行くことができる。公共の劇場が鑑賞事業だけに力を入れることが、あまり意味をなさない時代になってきたのです。

芸術監督が 劇場の価値を高める

劇場がきちんと機能するためには、学習機能、交流機能、創造・発信機能について、予算のバランスをとりつつ運営しなくてはなりません。そのためには芸術監督や劇場プロデューサーが必要です。

僕は、'02年から6年間、埼玉県の富士見市民文化会館で芸術監督を務めました。富士見市は、池袋から電車で30分のベツトタウンで、首都圏内のどこにでも舞台作品を鑑賞しに行くことができる立地です。

そこで僕は、当時の富士見市が地元出身の住民が1割に満たない新しい街だったことから、「市民の融合を図るための

交流事業を中心に行うべき」と提言しました。

そして、ワークショップや対談など、アウトリーチ活動をしてくれる上演団体に限定して鑑賞事業を行ったのです。

「こまつ座や『演劇集団円』などの有名な劇団も同じで、井上ひさしさんの講演や岸田今日子さんと僕の対談を入れてもらいました。

これは僕が芸術監督で、僕がお願いしたから実現したことです。自慢ではなく、これが芸術監督の仕事なのです。こういったコネクションが活きてくること、それが芸術家が劇場を運営することの一番のメリットです。

創造・発信事業については、多くの地域の方から「市民参加ミュージカルで創造している」、「そこまでは予算がない」という話を聞きます。

創造・発信型の事業は「税金を投入して作品を創り、その作品が市民・道民の有形無形の財産になる」ということが重要で

す。市民参加型の上演作品は、地元以外では有料公演が成り立たないという現状を考えると、創造・発信事業には当てはまり

ません。

また、予算の問題については、例えば、富士見市では、平日の昼間に空いてしまう施設を、稽古場に困っている東京の小劇場に無料で貸しました。

そのかわり、リハーサルの公開を義務つけて、市民が稽古の様子を鑑賞できるようにしたのです。また、PRツールに「制作協力:富士見市民文化会館」というクレジットが入るため、市民が誇りに思えるものにもなり、その公演会場まで足を運ぶようにもなりました。

お金がないときには知恵と情熱で方法を探すこと、これも芸術監督の仕事です。だから芸術監督がいたほうが、低予算で質のよい芸術を市民・道民に届けることができます。

劇場法(仮称)で 劇場が舞台人がかわる

今、芸術協などを中心に提言、検討されている劇場法は、劇場の設置目的と各劇場が担う



役割を明確にするものです。

ここでは、全国に30〜50の創造発信拠点となる劇場をつくらうとしています。そこに各館1〜2億円の支援をして、きちんとした作品を創ってもらう。さらに、鑑賞拠点となる劇場を200ぐらいとし、数千万円の支援をして、創造拠点で創った作品の受け皿になってもらう。

例えば北海道なら、札幌の創造拠点で創った作品を、旭川や帯広、函館などの鑑賞拠点でも上演するわけです。

創造・発信拠点と鑑賞拠点には、芸術監督やプロデューサーなど専門のスタッフを雇用することが必須です。それ以外の公共の施設2千は、交流拠点として位置づけます。

例えば、フランスには創造・発信拠点として5つの「国立劇場」と、40〜50くらいの地域の創造拠点「国立演劇センター」があります。「国立劇場」は、「国立演劇センター」よりも大きな予算を持ち、最先端の舞台芸術を創りだしています。

今の日本の国立劇場の問題点は、国民の税金で創造した作品であるにも関わらず、それを享受できるのが主に首都圏の人のみ、ということ。また、

他の先進国とは違い、創造した作品を国内や海外で上演して資金を回収することをしていません。

さらには、現代演劇のための国立劇場が一つしかないことも問題です。できれば5つか8つ、札幌、大阪、福岡などにも国立劇場がほしい、人材育成の点からもそうあるべきです。

札幌など地方に国立劇場ができた場合、おそらく芸術監督や俳優が、一時的には東京から来ることになるでしょう。これは、サッカーや野球のプロチームと同じです。

選手や監督が地元出身ではなくても、地元の人が誇れる存在になればいいのです。大事なことは、北海道の舞台人がきちんと対等に戦っていける、健全でオープンな競争状態であることだと思っています。

また、プロではないけれども演劇などの身体表現活動を中心に生活したい人には、「コミュニケーション教育」という、新しい道を設けていきたいと思っています。今年、すでに実施され、全国190の自治体で約300の小中学校・高等学校等に、俳優やダンサーなどが派遣

されています。

僕はこの「コミュニケーション教育」で5千人、劇場法による制度設計で5千人、合計で1万人の実演家たちの雇用を確保したいと考えています。

制作主体を劇場に そして競争力を高める

劇場法でも、創造主体はあくまで劇団やアーティストですが、制作主体は劇場に移ります。

今までのように公演ごとに少額を支援するバラマキではなく、創造拠点となる劇場にまとまった予算をつけ、芸術監督やプロデューサーが、大衆性のある演目、国際性ある演目、先進性の高い演目、将来に期待する若手たちの登用など、バランスを考えた予算配分をするわけです。

カンパニーとして支援を受けている例として、フランスではピーター・ブルックのRSCや国際演劇研究センター、アリアヌ・ヌーヌーシユキンの太陽劇団などがあります。

劇場法ではできない最先端のものや実験的なものを、そして、きちんとオープンの場で説明

できるものは生き残るのである。

公的な資金がはいるのであれば公的な説明が必要で、芸術家だけがその増外（まわりの）に置かれることはあり得ない時代なのです。

さて、制作主体が劇場に移ると、「レジデント・カンパニー」や「フランチャイズ・カンパニー」などと呼ばれる契約制が増え、劇場が劇団などと契約して一部制作費を負担し、年々何本かの作品を創ってもらう、という関係性が生まれます。

若い人達には、まず「フランチャイズ・カンパニー」をめざしてもらおう。才能があれば、演出家には30代半ばまでに芸術監督への道が開けるでしょう。ヨーロッパでは、早ければ20代で芸術監督になります。

若い演出家は芸術監督になることで、自分の作品のことだけでなく、「この劇場、この地域にどんな種類の作品が必要



か」を考えてプログラムを組むようになり、公共性を学び、その結果、自分の才能を発揮できなければ、3年ぐらいで契約期間が打ち切りになり、淘汰されます。

もちろん、芸術監督になって安定した収入を得る道を選ばず、劇場ともつながらず、自分の考える芸術性を自分達だけで追求することも可能です。

大切なのは「選択肢」があることです。フランスでは、20代後半から「国立演劇センター」の芸術監督を務め、その実績が評価されて「国立劇場」の芸術監督になる、というセオリーがあります。

芸術家にもこのように一般的な競争と淘汰のルートがあることが、舞台芸術全体の底上げにつながり、最終的には国際競争力を持った作品を創ることになると思います。

日本の演劇界をみても、劇作家、演出家、俳優、その水準は決して低くないと思います。

足りないのは、教育システムと劇場の制作の機能で、まずは劇場法によって国内市場を整備し、国際競争に立ち向かえる人材を一人でも多く育てたい、というのが僕の希望です。

豊かな食に恵まれた北海道。しかし、「北海道の食」はさまざまな物語をへて今にいたっています。食の地産地消を通じて見えてくる北海道の食の歴史や生活文化を、全4回にわたってご紹介します。

第1回 お米～北の人々のエネルギー～

開拓時代初期の頃、北海道での水田作りは禁止されていました。多大な労力を要し、寒冷地には適さないと政府に判断されたからです。それでも、米を食べたさに人々は水田を作り続けたのだといいます。米の歴史は、そのまま北海道の歴史を映し出しています。道民の生活を支えてきたお米とのかかわりをご紹介します。



道産米日本酒づくりに挑む ニシン漁の町、増毛町

酒

開拓民、炭鉱夫、番屋に集うヤトイ(雇い)。北海道で酒は労働の疲れを癒し、辛い日々を慰める大事な嗜好品でした。移民当初は本州からの移入酒が多く、高価なものに頼るしかありませんでしたが、しだいに地元で造る気運が盛り上がり、増えてきました。本格的な醸造業が育ち始めたのは、人口が一気に増えた明治10年代以降。移入酒と厳しい競い合いをしながら、北海道の酒造技術は育ってきたのです。

しかし、酒の原料のほとんどは水、そして米になります。北海道では酒造好適米が長い間作ることができず、醸造は出来ても米は本州から移送費を

かけて運ぶしかなかったのです。「いつか北海道で北海道の米と水を使った酒を」。土地の水、土地の米、そして土地が持つ気候やカビで育つ麹など、その土地が育む酒を造りたい。これは北海道で酒造りに携わる多くの人びとが願っていたことでした。そしてようやく平成10年、道産の酒米「初雫」ができ、平成12年には蔵元の粋を集めた作品「吟醸」造りに適した酒米「吟風」が誕生します。

明治時代にニシン漁の最盛期を迎えた増毛町や日本海沿岸地域では、活気にあふれた町の中で、日本酒は欠かせないコミュニティレーションツールでした。当時は道外の酒造米で造られていた日本酒が、今では道産酒米を使った「北海道の酒」を造りだせるようになったのです。北海道を発展させるために欠かせない活力として浸透してきた日本酒。北の大地から発信する日本酒造りに期待がかかっています。



美唄発、生活の中にある 新しいお米のかたち

粉



土づくりから冷害対策など、多くの困難を乗り越え定着した北海道の米作。にもかかわらず、米の輸入自由化による減反政策によって、米作りの規模は縮小傾向にあります。また、主食がパンや麺類に置き換えることにより、全国の米の消費量も、年々さがりつつあります。

そこで開発を進められたのが米粉。「道明寺粉」や「白玉粉」など、伝統的な和菓子に用いられるように、古くからあるお米の活用方法です。従来、米粉は粒の小さい「くず米」が原料でしたが、現在では、米粉化することで減反したのと同じ扱いになるため、粒食ができるお米も米粉の原料となっています。また、微細粉技術が発達し、細かい粒子でしか作ることが出来ないパン類などにも、米粉は応用されるようになったのです。

その流れの中で、道内でいち早く米粉開発に力を入れたのが美唄市でした。美唄市は米の収穫量が全道4位。市民参加型の「美唄こめこ研究会」を立上げ、パン・麺・菓子店の経営者、市民団体等が手探りで、米粉のおいしい食べ方を研究。平成17年から道内で製粉が可能になり、学校給食で気軽に食べられるようになり、給食や、街角のパン屋にあたり前のように米粉の食べ物と並べられる。市民の食生活に浸透した活動が注目を浴びています。



港町の歴史が語る 小樽の餅と解と仲仕

餅

小樽には餅屋が多いと言われています。しかも和菓子屋ではなく、「餅屋」が数多く点在しているのです。それには小樽の歴史が深くかかわってきているのです。

明治時代、政府は巨額の資金を投資して、北海道の開拓に力を注いでいました。道路、通信、教育などさまざまなインフラが整備され、本州からの本格的な移民ラッシュがはじまります。小樽港には「北前船」がズラリと停泊し、札幌と小樽が鉄道で結ばれ、しだいに鉄道が延びていくと、道内の産物や原料が

山積みされ、本州に向けて次々と出航していきました。停泊中の船舶と蔵との間を、仲仕を乗せた解が無数に行き交い、にぎわいをみせる小樽。仲仕の仕事は船が到着してからが勝負です。次から次へと荷物を降ろし、解で蔵へ運び、また船に運び入れる。その作業が終わるまで、眠ることもできなかったといえます。その仲仕達が食べていたひとつにお餅があります。仲仕達にとって餅はすぐ食べられ、腹持ちし、力がでる大事なエネルギー源でした。餅屋が餅の入った箱を首から下げ、売り歩くのが町の風景として定着していました。

時代が過ぎ、解も仲仕も姿を消しましたが、小樽の町には、今でも数多くの餅屋が暖簾をかけた、町の人々の生活にもお餅が根づいているのです。





地域からのお便り

地域で行われているユニークな文化活動の紹介や、地域のこんな活動が知りたい等の声をお届けしています。

札幌市 ぐくま基金事業・指導者研修会等開催事業

平成22年6月26日(土)・27日(日) 北海道立総合体育センター「きたえる」

第20回「心とからだの健康セミナー」を終えて

そして笑顔で楽しく

札幌フジカル・カルチャー 代表 福澤 禎子

「美しく年を重ねたい！出来るだけ長く手足も自由に動かしたい！！どこへでも元気にでかけたい！！こんな将来を私たちは願っています。」これが昭和53年に設立した私たち「札幌フジカル・カルチャー」のモットーです。この願いを伝え、自らも実践していく過程で、6人の主婦が約百名以上の指導員となり、延べ5万人もの会員との交流を持ち、現在も続いています。

平成3年に始まり、今回、満20歳を迎えた「心とからだの健康セミナー」は、体育・スポーツ活動をとおして、道民の健康生活を応援する目的のもと、(財)北海道生活文化振興基金から、現在の(財)北海道文化財団に受け継がれてきた事業です。

目的は、道内の各地域に、体操や体を動かすリクリエーション活動の指導者を育成しようという、年に一回、2日間

の試みです。対象は各地域の指導者・リーダー及びその意欲を持たれた人達です。

このセミナーを通じて私たちの活動は、稚内、網走、伊達、帯広など、道内各地での開催という新たな土地に種をまき、よりワイドに、よりクオリティを深めて実現してきました。

このように「意欲にあふれた、地域に根ざしたよき指導者・リーダーへの資質とはなんでしょうか？」それは「笑顔で、楽しく、自分の身のまわりの環境に適した、その人にあった手軽な健康づくりを提案、指導できること」と私は考えます。屈伸運動ひとつでも、さまざまな強さ・角度・速度があり、重要なのは本人の充実感や楽しいという気持ちをいかに引き出せるかということです。それゆえ、指導者はひとつの動作を学ぶだけでなく、さまざまな角度からとらえる

センスを磨くことが必要になります。相手が変われば、指導内容も変化していきます。

このセミナーでは、国内の第一線で活躍されている講師を招き、指導者、リーダーに有用な知識やノウハウを惜しみなく与え続けてくれました。これがある一時のテクニクとして使うか、指導の基礎として熟成させるかは、受講者の捉え方によって異なります。

団塊の世代が高齢化し、身近でおこなう健康づくりは、ますます重要となっています。いろいろな健康法が巷にあふれる現代では、よりベーシックでシンプルなものを選択することを勧めます。



札幌市 sapporo



北海道文化財団 自主事業 実施レポート

心とからだの健康セミナー

講師 珠数 泰夫

(「3力」身体改造研究所、かたの健康館) 主宰・館長
長谷川 聖修
(筑波大学大学院人間総合科学研究科・体育学教授)

参加者 103名

20回目の今回も、健康・体力づくり活動で活躍されている2名の講師を招き、「生活の基本となる正しい動作習慣を知る」、「身体の歪みを改善し、滑らかな呼吸を取り戻す」をテーマに、若者から高齢者まで、日々の暮らしで活用できる実践的な実習を行いました。

アート体感教室 in 遠別・稚内

実施日 平成22年7月1日(木)～4日(日)

場所 遠別町立遠別小学校、稚内総合文化センター

講師 近藤 良平

(振付家、ダンサー、ダンス集団「コンドルズ」主宰)

参加者 遠別町立遠別小学校

(ワークショップ:25名) / ミニライブ:150名
稚内総合文化センター
(ワークショップ:19名) / ミニライブ:80名

カラダを使って表現する楽しさを体験するワークショップに、遠別町と稚内市の小学生が参加。最終日には子どもたちの成果発表と、近藤良平さんのミニライブが行われました。



北海道舞台芸術情報フェア2010

実施日 平成22年7月13日(火)～14日(水)

場所 札幌市教育文化会館

参加者 85名(市町村教育委員会、文化施設などの事業担当者や芸術文化鑑賞団体など)

「コミュニケーション教育・アウトリーチ事業」

実演芸術家などのアーティストが、学校活動の一環や、公共的な施設を訪問して芸術普及活動を行う、アウトリーチ（現場出張型）事業。

文化庁でも「児童生徒のコミュニケーション能力に資する芸術表現体験」として、今年度は道内5市町村の小・中学校で開催されます。ここでは、これまでのプログラムにかかわったアーティストから、全4回にわたって伝えていただきます。

十別市・パントマイム
学校でパントマイムを
体験するということ

私が行うワークショップは、大きくは「おしゃべりでの解説を交えた導入プログラム」と、「身についたテクニクで創作体験する」という2つのプログラムになっています。

まずは、お互いにさまざまな顔の表情や、身体の動きでイメージしたもの、友達同士で見せあつて警戒心を解き放ち、「遊ぶ心」をわきあがらせます。

続いて「壁」や「人形振り」などのテクニクにチャレンジです。身体の動作だけで、観る人達がイメージ出来る3次元を創り出します。

最後の作品づくりでは「イメージを共有すること」を重点に行います。例えば「海」という作品を演じる場合、最初に「泳ぐ動き」をします。これに、「砂が熱い」「触覚」、「潮の香り」「嗅覚」、「波の音」「聴覚」、「塩

辛い」「味覚」など、「五感」が伝わる動きを加えると、イメージを具体的に共有できることになり。

パントマイムは、言葉を使わないので、「どうやって伝えるか」だけではなく、「何を伝えていくのかを理解しようとする」ことが重要となります。

もちろん、十別以外の学校でもワークショップや公演をさせていただきましたが、「十別」の子どもたちは、よい意味で「出たがり」であり、また観客として「観る力」、「受け取る力」をすでに持っていました。これは「あさひサンライズホール」が行ってきた鑑賞型事業、このアウトリーチ型のワークショップ、市民参加劇などの参加型事業を通じて、地道に培った素地があるため、地域の人達が「遊び心」をもてる積極的なプログラムへの取り組みの成果であると感じています。

このような素地があった上で、「文化芸術活動のまちづく



ブログやツイッターなどの「孤立した個人表現」があふれている中、「多様な表現方法で「遊ぶ心」をもって、「集団」で体験する」ということは、明日を担う子どもたちに、ますます重要になってきていると思います。

「里」を堂々とかけ、演劇や音楽、身体表現を個人として行うだけでなく、学校活動のひとつとして実施する「集団」としての相乗効果」により、コミュニケーション能力（「伝える側」「受け取る側」の相乗効果）が一層高まっていくのだと考えます。



マイミスト 山田 ヒデノリ [My夢Project] 主宰

旭川出身。19歳の時、ロバート・シールズ（アメリカのマイミスト）の公演に感銘を受け、パントマイムを始める。'91年から吉田明美に師事し、同スクールの講師となる。講師陣によるパントマイムグループ「ドリーム・ショップ・マイマーズ」を結成し公演活動を始め、その後、活動拠点を札幌に移し、札幌市東区に稽古場「黒猫座」を開設。現在、パントマイム集団「My夢Project（マイムプロジェクト）」を主宰し、舞台公演や道内各地での子ども達を対象にしたワークショップ、大道芸などへのイベント出演、パントマイム講座の活動などを行っている。



個々の個性を生かした振り付けで定評のある井手氏を迎えた3年目。オーディションで選ばれた7名を対象に、8日間の創作（クリエイション）ワークショップを開催。最終日には、その成果である30分間のショーイング（発表）を行いました。

ショーイング参加者 100名

ダンサー/出演者 7名

講師 井手 茂太
（振付家、ダンサー、「イデビアン・クルー」主宰）
斉藤美音子（イデビアン・クルー）

場所 かでる2・フレクリエーション研修室
ターミナルプラザことにパトス

実施日 平成22年7月10日（土）・8月8日（日）

アートゼミ事業

音楽、演劇、舞踊等の公演企画（「B2」企画）を、「平成23年度公演企画資料」として製作し、文化ホール等と道内外の公演企画団体との相互の連携や、ネットワーキングを目的とした、公演企画団体担当者による「プレゼンテーション・見本市」を実施しました。



[シリーズ 第12回]

この街 この人 陸別町

人から人へ、そして一人から大勢へ。
生活シーンでのアートの可能性は、
人を通して無限に広がっていきます。
地域の文化力を支えている、さまざまな人たちを通して、
道内各地の活動を紹介します。

Rikubetsu

<http://www.town.rikubetsu.hokkaido.jp/>

★陸別町



工房「TOMO」陶芸家

坂井 友子さん

Tomoko Sakai

生活のなかの楽しみをつくりだす陶芸サロン

陶芸教室は毎週一回ですが、基本は参加者が「つくりたくなったら」。「器は生活にゆとりを生みだすためのものなので、参加する方もゆとりのあるときに来て欲しいんです」。教室は、子連れOKのオープンな場で、料理を持ちよって夜まで続く日もあるそうです。

「移住者だから気づくことでもあります。町民が過ごしやすい環境を提案して、生活の中の楽しみをみつけていきたいです」と作陶の手を動かす坂井さん。陶芸教室では、明るく楽しい人柄の坂井さんのもとで、陸別の新しいサロンが生まれつつあります。

陸別町の中心から、さらに車で20分。自然豊かな小利別の地に、工房「TOMO」はあります。陶芸家の坂井友子さんは'01年に大工のご主人と長男とで小利別に移住。もとは郵便局だった建物を改装し、自宅兼工房として活動を開始しました。

新潟県出身の坂井さんは、全国をまわって陶芸を学んだのち、故郷に戻り陶芸家に師事して腕を磨きました。そして、自然と向かいあえる場所を探していて、陸別にたどりついたといいます。現在は「陸別移住を応援する会」の委員としても活動中。

陸別町観光協会 会長

本田 学さん

Manabu Honda

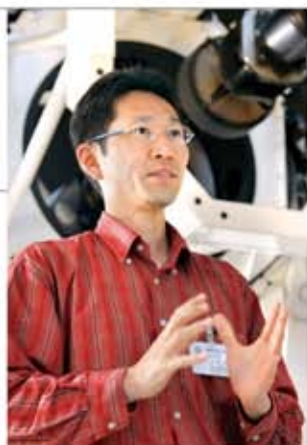
日本一寒いイベントを通して活気ある町づくりを

現在は、実行委員長を次の世代に託し、陸別町観光協会会長に就任。北海道商工会青年部連合会理事を務めたこともある本田さんは、全国を回って見てきた経験を活かし、ユニークなアイデアで陸別の町を盛り上げていきます。

「イベントのメイン、スノードームは毎年60基は必要。夜中に水をかけてつくるから、町の人の協力なしには出来ません」。町のひとりひとりに声をかけ、協力者を増やしていった本田さん。こうした人々の結びつきをつくりあげていくやり方が、新たな町づくりには欠かせないといいます。

「寒さは、ここにはかない宝物。そんな気持ちがあればフェスティバルの発端なんです」と語るのは、8年間しばれフェスティバルの実行委員長を務めてきた本田学さん。31歳という若さで商工会青年部長に就任し、人口3千人弱の町で行われるお祭りを6千人規模までに拡大し、陸別を盛り上げてきました。





銀河の森天文台 主任
笥 伸浩さん
Nobuhiro Kakei



1階展示室内は、大人も子どもも楽しめる仕掛けがあちこちに。一方、2階総合観測室には、名古屋大学太陽地球環境研究所の「陸別観測所」と、国立環境研究所の「陸別成層圏総合観測室」が併設。地球の大気を観測する重要な拠点になっています。

星の町陸別から未来を見つめて

SF映画の中に出てくるような巨大な観測機を、自在に操るのには、オープン当初から勤務する笥伸浩さん。この天文台は、全国でも珍しい低緯度オーロラが観測されたことをきっかけに、平成10年に誕生。道内2番目の大きさである、115cm反射望遠鏡がある天文台として人気を集めています。

東京都市田谷区で生まれ育った笥さん。星にかかわる仕事をしたいと一念発起し、大学卒業後に、再び理系の大学で勉強し、陸別に移住してきました。笥さんは、季節にあわせた観測会などを企画し、幅広い年齢層の方々に、星の紹介を続けています。

「宇宙という広い世界を知ることができれば、目の前のことにとらわれず、もっとたくさんの可能性に気づけると思っています」。星空に近い天文台から、今日も未来をみずえています。

陸別町ゆかりの文化の担い手たち

[アートサロンガンビー 代表]
齋藤 省三さん

陸別町の郷土史・関寛齋(蘭方医)研究の中心人物でもあり、町民芸誌「あかえぞ」を発行するあかえぞ文藝舎を主宰。

[彫刻家]
関 正夫さん

40年以上にわたり木彫りの馬の作品を制作。カツラ等の木材が手に入りやすいなど、良好な制作環境から平成18年、陸別に転居し、活動を続けています。

[国際ラリー支援歓迎実行委員会運営委員長]
浜田 始さん

旅館経営者ながらオフロードレースを主催。一般車両をベースにしたラリーカー競技「世界ラリー選手権」を陸別に招く活動を続け、平成16年に実現させるなど、陸別の活気づくりに尽力しています。

[NPO法人とから馬文化を支える会 理事]
林 繁徳さん

若手ばんば生産者。ばんえい競馬で絶大な人気を誇るナリタブソップを輩出。馬文化新聞などの発行にもたずさわり、道内での馬文化の継承に力を注いでいます。

[有限会社銀河の森代表]
山本 周二さん

「りくべつ鉄道」の動態保存に努め、全国でも珍しいディーゼル気動車の体験運転が出来る、「ふるさと銀河線りくべつ鉄道」が平成20年に誕生。その活動を通じて、文化遺産の維持に尽力しています。

今年のしばれフェスティバルの最後に、スタッフから手作りの「しばれくん人形」が記念にプレゼントされました。今後は、「しばれくん饅頭」の開発など、陸別ならではの特産品づくりに、力を注ぐつもりだといいます。





「ゲーム」



画家
盛本 学史
Satoshi Morimoto

1999年から制作発表を開始。ニューヨーク、東京などさまざまな企画展で作品を発表し、個展は30回を数える。三岸節子賞などの賞を、抽象具象などスタイルにとらわれない多様な作風で受賞する。最近では主に「文学的な幻想絵画」をテーマに発表している。現在、無所属、富良野市在住。

芸術が愛されるためには、美しい物語が必要だと私は考えています。かつて、仏教美術やキリスト教美術などが人々から愛され、栄えたように…。

宗教とは、こうあるべき！という概念は、私にはあまりありません。むしろ、「いかに誠実に物語を語るか？」というところにその本質がある、と考えています。

「生きる」とは何か？「愛」とは何か？「絵画」とは何か？「芸術」とは何か？…。

その果てることのない自分に対する問いかけのみが、自分の絵画を「芸術」たらしめる根拠であり、「芸術」とは「未だ見ぬ心」と断言させるのだと思います。(盛本)

information 各種事業の案内

HAF アルテ ポルト (アートで賑う港)

9月より当財団に「アルテポルト」を開設します。
来年12月まで、道内作家の作品を展示し、月に1度「ミニトーク」を開催します。

展示時間 平日9:00~17:00

展示作品 9月:柿崎 照
10月:阿地 信美智
11月:渡會 純价

※「ミニトーク」の日時等、詳細はホームページをご覧ください。

舞台創造支援事業 「新冠ジャズワークショップ2010」

新冠町レ・コード館を会場に、全6講座が行われています。

場所 新冠町レ・コード館

講師 若林雅久(レ・コード館ジュニアジャズバンド音楽監督)他

- 講座1・講座2(終了)
- 講座3:音響技術講座/平成22年9月4日(土)~5日(日)
- 講座4:舞台照明講座/平成22年9月中旬
- 講座5:模擬公演の制作・上演/
平成22年9月中旬~平成22年11月23日(祝・火)
- 講座6:舞台公演を評価する/平成22年12月中旬

文化の宅配便 公演のご案内 (9・10月)

公演名 金子竜太郎(和太鼓公演)

新ひだか町 三石
会場:三石中学校
公演:平成22年9月25日(土)
18時30分開演

厚沢部町
会場:厚沢部町 町民交流センター
公演:平成22年9月28日(火)
13時30分開演

公演名 ユニット・リトルバレエ

泊村
会場:泊村公民館
公演:平成22年9月5日(日)
18時開演

アート体感教室 「石川直樹ワークショップin松前」

写真家で冒険家の石川直樹さんが、昨年度の天売島に引き続き、自身の活動や作品を紹介し、子どもたちと一緒に写真を通して、身近な旅・冒険を体感するワークショップです。

場所 松前町立松城学校及び学校周辺の地域

期間 平成22年9月27日(月)~28日(火)

北海道舞台塾 北の元気舞台 地域間交流公演

上演団体、作品 劇団千年王国「廣作者」

【釧路公演】

場所 釧路市生涯学習センター「まなぼと繁華」大ホール

期間 平成22年9月23日(木・祝) 14時開演

問い合わせ 劇団東風/TEL&FAX(代)0154-42-4287

【美唄公演】

場所 美明市民会館大ホール

期間 平成22年10月3日(日) 16時開演

問い合わせ

美明市民会館/TEL 0126-63-2185



静かに訴えかけてくるもの

強く反射してくるもの

生命からのささやきに敏感に耳をかたむけ

真摯に向かいあうアーティストの作品を紹介します



「ハッピーランド」



「超重力ガール」

ITで未来をクリエイト。

私たちHBAは、お客様とお客様の未来を先進のITで結ぶクリエイター。



3つの事業をリレーション。

最適な情報システムの提案、構築、運用を
万全のセキュリティで総合的にを行います。

●システムインテグレーション事業

求められるニーズに対し基本設計から保守に至るまで総合的なソリューションを行います。

●アウトソーシング事業

万全のセキュリティ対策で、お客様の事業における情報化投資の削減をサポートします。

●ソフトウェア開発事業

プロジェクトマネジメント力を生かし、確かな品質と最先端の技術力を提供します。

HBA 株式会社 HBA

〒060-0004 札幌市中央区北4条西7丁目1番地8
TEL.011-231-8301 FAX.011-281-0915
<http://www.hba.co.jp/>

2010年4月、

「通信制課程」誕生!

願書
受付中



とわの森三愛高等学校

(酪農学園大学附属)

広域通信制課程・単位制・普通科

通学コース

通信コース

〒069-8533 江別市文京台緑町 569 番地

JR 函館線大麻駅から徒歩7分 (札幌駅から最速12分)

電話 011-388-4831

URL <http://t3ih.jp/>

とわの森 通信制

検索

**HOKUSEN
CARD**

ひとりひとりの、いまと、つぎへ。



<http://www.hokusen.jp>

株式会社 ほくせん

本社/札幌市中央区南2条西1丁目 北専ビル
TEL (011)261-6101

**HOKUSEN
MY CARD
PROJECT!**

あなたのお一枚、をめぐらして。

お取引に応じてうれしいサービス!

道銀取引優遇サービス[ステップドゥ]

**ステップ
Do**

うれしい
サービス

道銀ATM・コンビニATM
時間外手数料 **0円**
(5日)

※手数料は利用された普通預金口座へ翌月ご入金いたします。
※コンビニATMをご利用の場合は別途利用手数料105円がかかります。

Doポイントクラブ 提携先のマイル・
ポイントに交換できる

**Doポイントが
毎月自動で貯まる**

ステップドゥは
お申し込みが必要です。
※年会費・手数料はかかりません。

お申し込みはカンタン!詳しくは窓口または
当行ホームページにてご確認ください。
<http://www.hokkaidobank.co.jp>

**どさんこバンク
北海道銀行**